

ヘリコプターによる救助と注意事項

石川県自然解説員研究会 山下光信



石川県防災ヘリコプター「はくさん」

新聞を読んでいると、石川県防災ヘリコプター（以下防災ヘリ）による救助や捜索の記事が目につくことがあります。その中でも特に、「春は山菜、秋はキノコ採り、夏は登山者が」の記事だと、捜索中なのか、救助されたのか、大丈夫だったのかとつい気になってしまいます。

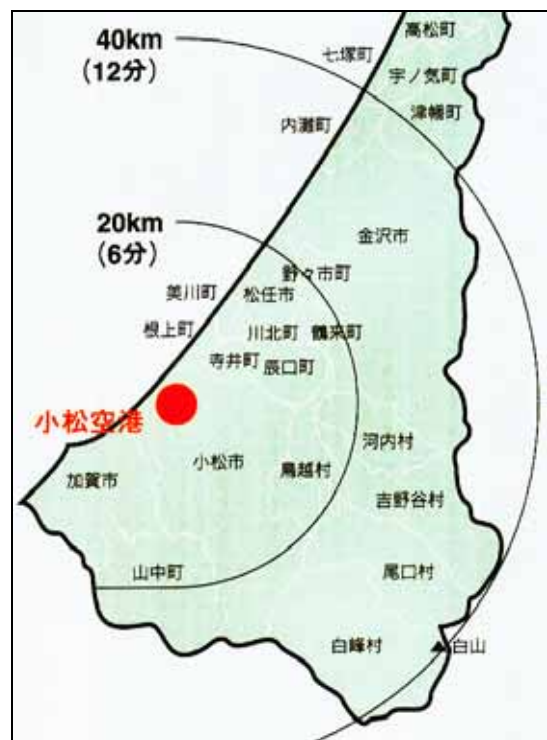
このような新聞記事が、たびたび報道されるのも最近のことで、全国の自治体に消防防災ヘリコプターの配備が進み、登山者等の救助や捜索の方法も変わってきました。石川県でも消防防災ヘリ「はくさん」

が平成9年4月に運航を開始しています。名前の通り「白山」を愛称としており、機体の「赤」は消防のイメージカラー、「白」は白山の雪、「青色の二本線」は能登半島の外浦と内浦を表しているそうです。

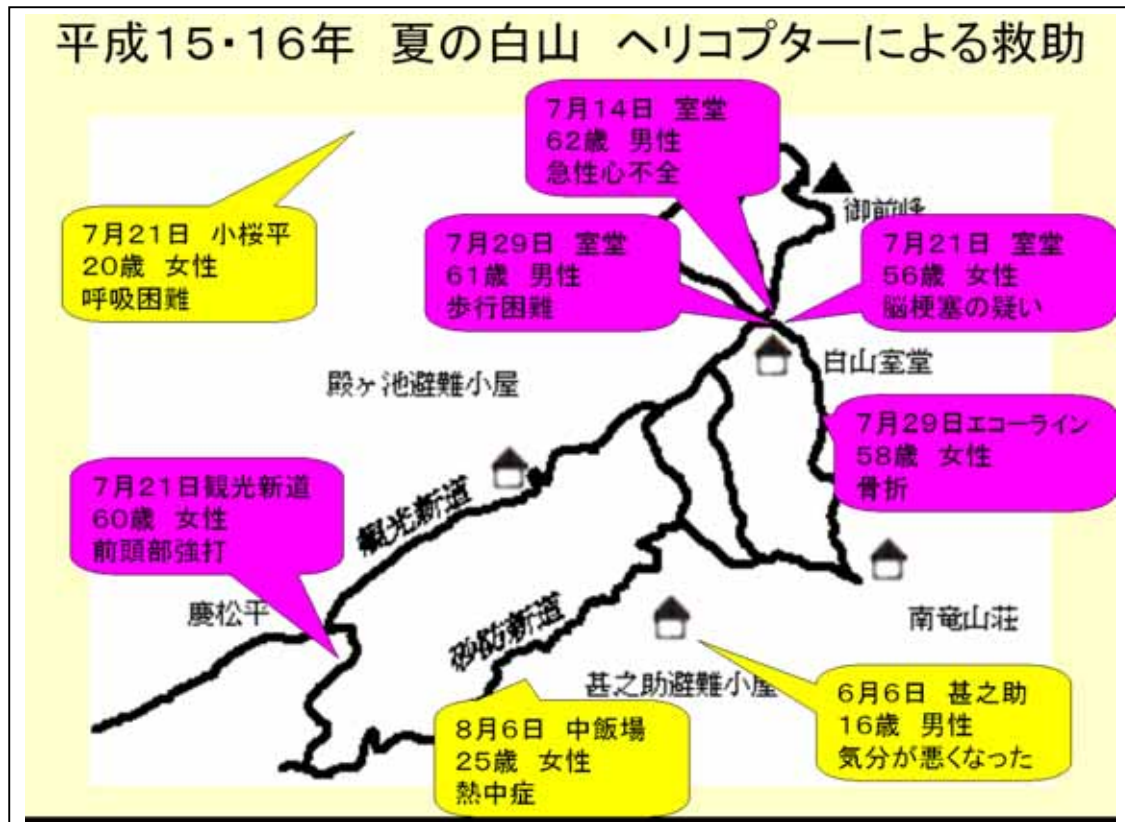
白山と防災ヘリの救助状況

防災ヘリ「はくさん」の運航基地は小松空港内にあり、その運航時間は、日の出から日没までとなっています（通常は午前8時から17時15分まで：平成17年12月現在）。また、性能は、最大速度259km（巡航速度226km）で、小松空港を飛び立つと白山室堂までわずか12分足らずで到達します。防災ヘリの平成15年の緊急運航は69件で、その内白山付近の山岳で8件（他、航空自衛隊小松救難隊2件）、里山等で22件救助や捜索のために運航をしています。

平成15年と16年の夏の白山での救助状況をみると（次ページ）55才以上の救助が5件有り加齢が要因と考えられるものもあります。また、25才以下の救助が3件となっています。白山は花の山ともいわれ、クロユリやハクサンコザクラに出会うために登山する中高年も多く、体調管理には十分注意するよう呼びかける必要があります。一方、若い登山者の救助もあることから、若いからといって自己過信にならないようにしなければならぬと思われま



防災ヘリ到着時間（小松空港から）



遭難してしまったら

しかし、残念なことにそれに遭遇してしまった場合、人命救助に最善を尽くさなければなりません。そのためには、救助の要請、特にヘリコプターを要請するときのポイントを知っておくことは重要なことです。そのポイントは、早く、正確に位置を知らせることで、ヘリコプターによる救助は、地上ではかなりの時間を要するのに対して、圧倒的に早く救助することができます。しかし、夜間は飛べないため、救助要請を躊躇していると日没となりその日の内に救助できなくなります。救助が翌朝となると、地上からの捜索隊も出動することになるため、早く、正確な位置を知らせることは、無事救助される可能性が高くなるとともに、最終的にはコストも軽減されることが考えられます。

ヘリコプターは、パイロットが目視により操縦するため、視程の悪い場合や雲の高さが低い場合は、救助に向かうことができません。

遭難位置を知らせる

遭難位置を正確に救助隊や防災ヘリに知らせるのは、困難なことが多いと考えられます。白山の登山道でも樹林帯が多く、登山者同士なら分かる場所でも、なかなか救助する側に通じない場合があると思います。遭難位置の通報は、できるだけ客観的なデータで知らせる必要があり、一番有効なのは、GPSで測定した緯度経度を知らせることです。しかし、一般にはまだ普及していませんので、地図上で位置の特定、方位、地形、高度、植生など、なるべく多くの情報を知らせることや、遭難地点がどのあたりかによって稜線に登るか、登山口までさがるかの判断が必要です。また、ヘリからの最終的な遭難者の特定は目視となります。そのため、見やすいところに出て赤や黄色の雨具を振ったり、識別しやすい色の登山ウェアを身につける等、見つけてもらえるよう努力する必要があります。また、カメラのフラッシュを発光させるのも有効だと聞いています。

通信手段

一般の人が山へ持って行くことができる通信手段は携帯電話です。携帯電話は、山に入ると電波が届きにくい状態や圏外となりますが、幸い白山の夏山では、多くの登山者の利用する別当出合から弥陀ヶ原にかけて、通話が可能な携帯電話もあります。遭難地点の近くで通報できれば、防災ヘリと対話しながら「いま頭の上を通った」等ヘリを誘導でき、早期発見に大きな力を発揮します。また、道に迷った時は位置が通報できないので、迷った時の鉄則通り登ることが有効で、ヘリから見やすくなり携帯電話の通話範囲が広がります。連絡先は「119番」で、消防署の当直に電話が掛かり各県の防災ヘリコプター基地に連絡が入ります。

なお、携帯電話のバッテリーは電波の届かない場所や「圏外」表示の状態での待ち受けでは、使用できる時間が半分以下となることがあるので、電源を切る等バッテリーの消耗に注意が必要です。

ヘリコプターが救助に来たら

ヘリコプターが救助にきたら、付近の危険な物を取り除き、帽子など飛びやすいものはおさえ、ヘリコプターの真下に入ったたりちよろちよる動かないようにします。ヘリコプターが真上にくると、レスキュー隊員から拡声器により指示があった後、隊員が降下してきます。

このように、文書に書くと簡単そうですが、山岳でヘリコプターにより遭難者を救助する場合は、地形的な気流のみだれにより突風が吹いたり、天気が急変することもあります。また、救助する場所の足場が悪いなど、救助する側も命がけの作業となります。



ヘリコプターが真上に来たら……

課題

山岳等の遭難救助に公的ヘリコプターを使うことは「無駄遣い」との考えもありますが、安易な要請を排除しようとする、本当に助けが必要な人に手が届かない事態の発生する恐れがあります。また、ヘリによる救助が一般的になると、「なぜ早くヘリを呼ばなかったのか」と判断ミス責任を問われる時代になってきているとも思えます。実際には、「子供が疲れたと言っているから」といった、安易な要請もあり困惑することもあると聞きます。しかし、人命に係わる遭難が発生した場合は、躊躇することなく救助要請をすることが必要です。

参考資料：石川県消防防災ヘリコプター「はくさん」業務統計